
姥捨て

ぐり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

姥捨て

【Nコード】

N3969E

【作者名】

ぐり

【あらすじ】

年老いた母を施設に入居させる事になった。息子である正男には納得出来ない思いがあった。母親を見捨てるような罪悪感が消えないまま、施設への車を走らせる。

始まり

働けなくなつた年寄りが山に行く事は、仕方がない事なんだよ

そんな声が聞えて来たような気がした。昔読んだ本か、テレビの昔話のアニメに出て来たセリフだと思う。同時に年老いた母を背負つて罪の意識にさいなまれながら黙々と山路を登る様子までが見えたような気がした。

「もう、荷物積み終わったよお」

「じゃあ、そろそろ出かけましょうか」

家族の音がする。

『年寄りを施設に入れるのかそんなに嬉しいのか』

正男は心の中で毒づいた。会社を休んで今日は母親を遠くの老人施設に送り届ける。

母が落ち着いたら、妻の恭子とは離婚するつもりだ。そう正男は思っていた。

「お父さん、そろそろ出ましよう」

恭子に促されて、重い腰を上げる。

「僕、助手席！」

息子の正春がサッサと車に乗り込む。今日は平日の筈だが、春休みだという事に気付く。4月から中三になるんだった。

そう思うと又気持ちが暗くなる。息子の受験を考えて手間の掛かる年寄りを施設に入れるような気がする。

「おばあちゃん、乗る時気を付けてね」

娘の真由の声。真由も短大を卒業して、来週からは社会人になる。

恭子が最後の戸締りを確認して車に乗り込んでくる。母を真ん中

に挟む形。

『別に護送する訳じゃないんだから』またひそかに毒づく。

同居

早世した父親の十三回忌の時の母はまだまだ、元気だった。

少しばかりの畑を耕し、花を育て、近所の人とも活発に行き来をしていた。同居の話が出た時も、全然相手にしてくれなかった。

「お前達の田舎を無くす訳には行かない」

「自分の事は自分で出来る。気楽で今が一番良い」

それが、母の答だった。

その後、正男の妻である恭子は、末っ子の入学を切欠に、元看護婦（今は看護師と言う）の資格を元に、介護施設で働き始めた。看護師の他にも老人介護施設で働くのに有利だと言う資格も積極的に取り、正規雇用のチャンスも物にし生き生きと働いている。

正男も最終的には長男である自分が母を引き取る事になると思っていたので、恭子の仕事に関しては不満を持つと言う事はなかった。盆休みを利用しての帰省の度、母が年老いて行く様がハッキリと見て取れた。恭子が勤め出して三度目の帰省時に、兄妹三家族が揃った所で、改めて同居の話を持ち出した。

「兄さんの所が良いんじゃないの？もう、子供の手も掛からないみたいだし」

妹の恵が言った言葉で、ほぼ本決まりとなった。

次男の正次の所は、自宅を購入したばかりで、子供もまだ小さい。恵は、嫁に行った身だし、現在四人目を妊娠中。

自身も産まれ育ち、子供達を産み育て、夫の墓もあるこの土地を離れる事を母は嫌った。だが、正男にも仕事がある。子供の学校の事もある。

定年退職したら、此处に戻って来る事もあり得る。どうしても、嫌なら戻っても良い。家はこのままにしておいて、分家の人に時々家と墓の手入れをして貰う。という条件でとりあえず母を千葉県

正男の家に引き取る事に決まった。

介護と仕事

母と暮し初めても恭子は勤めを辞めなかった。それが正男の中で不満の芽を出していた。恭子が近くの共同農場に畑を借りたり、庭に花壇を作ったりしていた。母をまだ働かせるつもりかと思うとうんざりした。それよりも母と一緒に過ごして欲しいと願っていた。環境が変わった為か母親が段々物忘れが酷くなって行くようだと言いた時には、

『それみたことか、お前が放っておくからだ。少しは反省して勤めを辞めて一緒にいれば良い』と思った。

病院に連れて行くと、「認知症」だと言われた。ヘルパーさんが来るようになったのも正男には面白くない事だった。介護の専門家が家に居るのだからわざわざ人を頼む必要など無いと思っていた。

そのうちに、トイレの粗相と徘徊が始まった。

在る日正男が家に帰ると恭子は母の粗相の後始末をしていた。

「いい加減、勤めを辞めて家で介護をしたらどうだ？」

正男の言葉に恭子は何も言わない。

「他所の年寄りの世話をするなら、家の年寄りの世話をしろ」

自分でも驚く位キツイ口調になった。振り返ると母を着替えさせた真由が母を連れて傍に立っていた。母が「怖い」と言って泣き出す。それを支えるようにして、恭子は母を自室に戻した。そして、自分の蒲団を持って来ると、

「今日からは、お義母さんと一緒に寝ます」

と言って、母の部屋に行ってしまう。

『なんだあの態度は』腹立ち紛れにビールを注いでいると真由が相向かいの席に座って言った。

「さっきの言葉ってひどくない？」

冷たい視線。正男が何か言わなくてはと口を開くより先に真由が続けた。

「友達のお母さんが勤めを辞めて介護生活に入ったの。同じような境遇で話をする機会が多いんだけど…」

真由が言うには、友達の母親が介護に専念するようになって、目に見えてやつれて来た事、愚痴ばかり言うようになった事。等を話した。

「そんなの、家に年寄りがいて、介護が必要になればするのが当然だ」

正男が言うと、真由は冷たく応えた。

「じゃあ、お父さんがすれば？自分の母親なんだから」

『何を言っているんだ』意味不明な言葉、自分に向けられる筈の無い言葉。

「出来ないんでしょう？そうだね。お父さんだって本音を言えば仕事を辞めて介護なんて出来ないでしょう？」

「俺とかあさんは違う」

正男の言葉を無視するように、真由が言う。

「最近、おばあちゃん徘徊してないでしょう？なんでだか分る？正春が学校から帰って来るとおばあちゃんの部屋で勉強するようになったからだよ。正春が勉強しているのを嬉しそうに見ているんだって。それで二人でお茶のんでお菓子を食べて、母さんが私が帰ってくるまで過ごしているんだよ。勿論、私だって家に居る時間は出来る限りおばあちゃんと一緒に過ごしてる。おかあさんもそう。何もしてないのはお父さんだけ」

「それは、仕事が…」

正男は血の気が引くような思いがした。自分の知らない間に、自分以外の家族はそれぞれ助け合っている。中学生の正春でさえ。

「確かに、おかあさんの仕事は介護に関係ある仕事だけど、それは単なる職種の問題でしょう？それに、お母さんが仕事を辞めて介護に専念したからって、おばあちゃんの認知症が治る訳じゃないでしょう？」

たたみかけるような真由の言葉に返す言葉も見あたらない。

「結局、おとうさんは自分以外の誰かに押し付けたいだけじゃない。それも、他人じゃなくて家族の中の誰かですませたいんでしょう？ それを1人で背負わされる人の人格とか生活ってどうなるのかしらね」

何か弁解しなくては…弁解？自分が？誰に？何を弁解すると言うのだ。正男は自分の思考に戸惑う。

「この家で、帰宅してからおばあちゃんの所に顔を出さないのは、お父さんだけよ」

完全に打ちのめされた。何かなんだか分からないが、惨めな敗北感が正男の全体を包んでいた。後悔なのか？遅く帰宅してもせめて寝顔だけでも見に行っていれば良かったのか。付き合いを断わる努力をしなかった事を悔いているのか。恭子が勤めを辞めないからあてつけのつもりだったのか。自分の親なのに。

「まあ、私も言い過ぎた。ご免。私も偉そうな事言えない。お母さんが勤めていなければ、多分全部おかあさんに背負わせてしまうと思うから」

そう、全部背負わせてしまいたかった。自分に面倒が降り掛からないように。誰だってそうだ。

「正春ね。おばあちゃんと勉強するようになってから覚えが良くなつたって喜んでいた。それで良いと思うよ。家族皆で出来る事をし、それで済んでいる内は良いんだと思う」

そう言っ、真由は自室に戻って行った。

尊厳

日曜日の朝。休日出勤も、出張も、ゴルフも無い日曜日。朝寝坊を堪能した正男が二階の寝室から降りてくると、台所が騒がしい。真由と正春と母で騒ぎながら何かをしている。どうやら、お菓子を作っているらしい。恭子は電話の最中だった。

「さあ、飾りつけはおしまい。後はオーブンで焼きます」と真由の声。皆で居間に移動してくる。

「それじゃあ、宜しくお願いします」

恭子も電話を切る。正男にコーヒーを入れて手渡しながら相向かいに座る。

「おとうさん。あの話、決まりそうだからいいでしょう？」

一瞬なんの話だか分からない。

「ロングステイの入居の話よ」

そういえば、そろそろ認知症も受け入れてくれるホームに入所させたらどうかという話をされたような気がする。その時自分はどう返答したのだろうか？

「お前はそっちの知識もあるんだからお前が決めれば良いって言うてくれたから、探して手続きを勧めていたんだけど、空が出来たので来週には入居出来るって話なんだけど」

そう言われれば、そう言ったような気がする。たしか、皮肉のつもりで言った筈だが、逆手に取られたと言う事か。

「そうは言っても。他の兄妹だっているんだ。うちだけで決められる筈も無いじゃないか」

精一杯の抵抗。

「もう話してあるわよ。だって普段から連絡する時に嫌がって私にさせるから」

憮然とする正男の前にパンフレットが置かれる。見て気分の良い物では無い。が、表紙の絵が目を引き付ける。

「是は…」

姥捨て山。正式名称は別にある、が地元の間人は皆「姥捨て山」と呼ぶ、故郷の山。

「住民の高齢化が進んで、県が補正予算を組んでくれて、「デイサービス」「シヨート」「ロング」と総合的に備えた施設が出来たの。まだまだ、これからの部分も多いけど、評判は上々よ」

「母さんはどう思っているんだ？」

認知症が進んだ母親が反対した所でどうにもならない事は分っているが何とか反撃の糸口を掴みたくて話しかける。そういえば、母親と話をするのは、何ヶ月ぶりだろう。

母親は少し困った顔をして、そして言った。

「おかあさん、この人だれ？」

恭子は困った顔をしている。

「おねえちゃん、誰なの？」

今度は、真由に効いている。

「おばあちゃんの息子の正男だよ」

「正男？まあちゃんはここに居るでしょう」と正春を抱き寄せる。

正男は言うべき言葉が出なかった。自分は知らなかった。気付かなかった。母親が嫁の事を「おかあさん」と呼ぶ。孫の事を「おねえちゃん」と呼ぶ。そして、自分の事を「誰？」と聞く。

仕事を辞めないと正男が責め立てた恭子は「おかあさん」と言われている。信頼されている。実の息子の自分は…。

いたたまれなくなつて、家を出た。

次の一週間は仕事と頻繁に届く、「土日は休んで下さい」メールで明け暮れた。

そして、正男は車のハンドルを握る。母親を姥捨て山に捨てる為に。

約2時間の運転を経て、見慣れた懐かしい風景が見えて来る。と

後部座席から大きな声が聞えた。

「姥捨て山よお。おねえちゃん、まあちゃん、姥捨て山よお……嬉しいね。戻って来たね」

「お義母さんのこんな嬉しそうな声、大きな声、聞いたの久しぶり」

助手席で恭子が涙ぐんでいる。そういえば、親父の墓参りも身体に負担がかかるからと正男と正春で日帰りで強行していた事を思い出す。

「これからは、皆でお墓参りも出来るからね。おじいちゃんの傍に行けて嬉しいね」

真由が優しく語り掛ける。

「うんうん。嬉しいね」

ホームからは「姥捨て山」が良く見えた。そして、玄関には、弟家族、妹家族が待っていた。

恭子が事務室で最終確認をしている間、レクレーションルームと言う場所で待っていると介護士に連れられた年寄りが傍に寄って来る。

「まあ、ハナちゃん、やつちゃん」

母親の声。

「あーちゃん。おかえり」

折紙で作られた首飾りをかけて貰って母は嬉しそうに答えた。

「ただいま」

職員の人の話では、地元と言う事で母の幼馴染も何人か入所していたり、デイサービスに通っていたりするそうだ。恭子は、それも入念に確認したらしい。

妹の同居している義父母もデイサービスを利用しているらしい。

「ここなら、きがねなくかあさんの顔見に来れるから」と言っていた。

彼岸には墓参りを一緒にする約束をしてホームを後にした。帰りの車中で恭子が言った。

「年を取るとね、遠い記憶の方が近くなるらしいの。本当は、うちに連れて来た事を後悔していたの。生まれ育った場所から私達の都合で知らない所に連れて来て、おかあさんがそれで幸せなのかずつと悩んでいた」

自分だったらと考えた時に、たとえ嫁がずっと付き添っていてくれてもその淋しさ、心細さは解消されないと思った。故郷に施設が出来る計画は知っていたので、資格を元に職を探してそこで働けるようにして、自分と子供達だけでも姑を連れて戻ってくるつもりだった。けれど、予定外に早く認知症を発症してしまった、などの事を恭子は、思いつくままポツリポツリと語った。

「なんで話してくれなかった」

「だって、あなたは仕事が忙しくて、それに仕事を辞めない私に腹を立てていた。冷静に話合える状態じゃなかったでしょう？」

「まあ、うん」

「でもね、きつと分ってくれる日が来ると思っていたわ」

正男の中で離婚する意志は綺麗に無くなっていた。

母親の弾んだ声、嬉しそうな笑顔。それは、文句ばかり言っていた正男には到底引き出す事が出来ない大プロジェクトだと素直に思えた。

「まあ、その俺も悪かった」

精一杯の謝罪の言葉。

「もう、素直じゃないんだから」

真由の一言で車中に笑い声が響いた。

尊厳（後書き）

親が年老いた時に子供はどうすれば良いのか、ハッピーエンドはどこにあるのか。

親の介護の問題で夫婦の意見のすれ違いは何処にでもある話だと思います。悲しい現実として、女性が介護の部分を背負う事になるのも事実です。

1人の人間に背負わせて済ませてしまっただけで良いのか？そう考えるきっかけになれば幸いです。

入所した所で話は終わっていますが、この後の話は各自のご想像にお任せします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3969e/>

姥捨て

2010年10月26日04時05分発行